



呉巡検調査を振り返って その一

樋口, 大祐

(Citation)

海港都市研究, 18:79-80

(Issue Date)

2023-03-27

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482807>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482807>



呉巡検調査を振り返って その一

樋口大祐

以前、横須賀で育った在日作家の立原正秋について調べたことがある。1940年代の皇民化の時代に青春を送り、戦後も「親日」的な韓国人を、横須賀を舞台とする小説に登場させている。彼について知れば知るほど、横須賀のような軍港都市が、近代日本の様々な矛盾、明と暗が複雑に絡まりあった複合体であることを痛感したことだった。

近代日本史の軍港都市は横須賀のほか、呉、佐世保、舞鶴の3都市が存在する。呉については子供の頃、高校野球やプロ野球の話題でしばしば名前を耳にしたことがあった。また、家族と大和ミュージアムに行ったことがあったが、海軍や軍艦のような、ナショナルヒストリーに包摂しやすい要素のほか、70年代の東映の実録映画『仁義なき戦い』シリーズのイメージ（菅原文太が演じるスクラップ解体に従事する広能組が呉の海沿いに設定されていた）も輻輳しており、やはり一筋縄ではいかないイメージがあった。最近では呉を舞台とするアニメーション映画『この世界の片隅に』が大ヒットする反面、呉市民の戦争加害者としての側面を捨象していることが指摘されていた。

昨年8月、海港センターの22年度下半期の事業計画を立てるのにあたり、韓国海洋大学の研究者仲間も誘ってこの呉を巡検することを思いついたのは、これら、近代日本のナショナルヒストリーのボーダーを意識させることの多いこの街の姿に迫ってみたいと思ったからである。しかし、呉に特に知り合いがいるわけではなかったので、広島大学に勤めている元神大留学生の陳斐寧さん、そのパートナーで原爆文学研究会の柳瀬善治さんを通じて、森戸学園の迫田久美子先生を紹介いただいた。ご主人が呉の方で、娘さんが韓国で日本語を教えておられる迫田先生は、親身になって呉市役所等とのルートを開いて下さり、1月6日午後、呉市役所にて、大和ミュージアム元学芸員の道岡さん、および戦後呉に駐留していた英連邦軍のもとで働いていた佐藤さんのお二人へのインタビューが実現した。その後、7日に大和ミュージアムと入船山記念館、呉市立美術館、8日に広島市宇品の郷土資料館等を訪問し、8日の夜には堺川に浮かぶ「かき舟」で、元海軍工廠の技術者であった方の娘・孫娘にあたる方々から、戦後の呉の生活史に密着した話を伺うことができた。

『仁義なき戦い』には、朝鮮戦争の時代、海軍の隠匿物資を英連邦軍に届ける役割を請け負うことを通じて、呉のやくざが発展したとのナレーションが入る場面がある。「かき舟」

の方々の、山守組の組長の奥さんのモデルとなった方と親交があった話は、海軍の遺産、英連邦軍、そして地域に根差したやくざ組織の三者のどれもが不可欠の形で呉の戦後史を形成していたことを実感させた。もっともそれは、旧軍港都市や米軍基地のある街においては、多少なりとも共通する現象である可能性が高い。このことは海港都市神戸の位置づけを考える上でも、もっと意識的に追及すべき問題であろう（たとえば戦後神戸の米軍基地は、三枝和子の小説群の重要な背景をなしている）。引き続き調査・検討を続けていきたい。